



カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852-8113
長崎市上野町 10-34
カトリックセンター内
Tel. 095-843-3869
Fax 095-843-3417
振替口座 01880-5-2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

2020 年
年頭教書

教皇様の呼びかけに こたえよう

大司教 ヨセフ 高見 三明



ミサ会場の長崎県営野球場に入場し、笑顔で会衆に応える教皇フランシスコ
©カトリック中央協議会

新年にあたり、皆様にごあいさつを申し上げます。昨年も公私共に大変お世話になり、心より感謝いたします。今年も、中村倫明司教様共々、よろしくお願いいたします。

昨年最大の出来事は、教皇様の日本訪問、わたしたちにとっては何よりも長崎訪問でした。多くの方々が、感謝と喜びの余韻の中で新しい年を迎えたことでしょう。教皇様は、はるかローマから長崎に來られ、感動的な出会いと力強く知恵に満ちたメッセージを残してくださいました。今後日本の教会と共にこれにこたえていきたいと思

1. 皆で平和をつくる

今年は広島と長崎の被爆75周年です。教皇様は爆心地公園で強いメッセージを述べられました。その中から3つの点を挙げましょう。

(1) 核兵器の所有は、誰もが持つている平和と安定への深い望みを満たすことも、安全保障への脅威から人を守ることもできません。それは、平和と安定を「恐怖と相互不信を土台とした偽りの確かさ」の上に築こうとする企てです。軍拡競争は「貴重な資源の無駄遣い」「武器の製造や売買などは「神に齒向かうテロ行為です」。

(2) 「真の平和は相互の信頼の上にしか構築できない」という原則のもとに、「核兵器のない世界が可能であり必要である」という確信」を持ち、その実現のために核兵器保有国も非保有国も国際機関も含めて、すべての人が参加すべきです。

(3) カトリック教会は、多国間の平和を促進するという不退転の決意を固め、それを、「神とこの地上のあらゆる人に対して果たすべき」義務と感じています。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的手段を絶えず支持し、主張していきます。

平和活動は「神の民の一人ひとりと与えられた一生をかけての使命」(H・ナウエン)と考えて、この教皇様の呼びかけを各自が全身全霊で受け止め、具体化に向けて皆で努力したいと思います。

2. 殉教の精神を今生きる

西坂での教皇様の第一声。「わたしはこの瞬間を待ちわびていました。わたしは一巡礼者として祈るため、自らのあかしと献身で『道』を示すこの兄弟たちの信仰を確認し、それによって強めていただくために来ました」

(1) 「この聖地は死についてよりも、いのちの勝利について語りかけ」、「復活を告げる場所」、つまり「自己中心、安穩、虚栄から解き放たれ、聖霊に満たされた人々のあかしに触れることができる場です」

(2) 殉教者たちのあかしは、わたしたちが「宣教する弟子」として、つまり、すべての人々、とくに助けを必要としている

11月23日〜26日 東京・長崎・広島へ

ローマ教皇、38年ぶりの来日



羽田空港に到着した教皇
©カトリック中央協議会

2019年11月23日(土)から26日(火)にかけて、教皇フランシスコは「すべてのいのちを守るため PROTECT ALL LIFE」をテーマに掲げ、来日した。ローマ教皇の来日・来崎は、1981年ヨハネ・パウロ2世以来38年ぶりのことだった。

フランシスコ教皇ご自身は若い頃、日本への派遣を望んでいたが健康上

中、日本の社会においても教皇の動向は連日、新聞やニュースで取り上げられ、そのメッセージは特に注目されていた。11月23日夕方、教皇は東京国際空港(羽田空港)に到着し、日本司教団の歓迎を受けられた。

24日朝、東京を出発し、9時過ぎに長崎空港到着。長崎市・純心女子学園前を通って爆心地公園へ。爆心地公園では「核兵器に関するメッセージ」を発信。続いて西坂公園へ向かい、日本二十六聖人殉教者への表敬。長崎大司教館で昼食。そして長崎県営野球場(ビッグスタジアム)で教皇司式によるミサが行われた。ミサ後は広島へ。広島平和記念公園で

の平和のための集いを終え、東京へ戻られた。25日はベルサール半蔵門で東日本大震災被災者との集い。皇居で天皇陛下との御会見(約20分間の会見と報道されている)。東京カテドラル聖マリア大聖堂で青年との集い。東京ドームでミサ。官邸で首相と会談、要人および外交団との集い。26日は上智大学でイエズス会員とのミサ。上智大学への訪問。東京国際空港(羽田空港)から航空機でローマへ。

教皇は各訪問先でメッセージを発信された。教皇から受け取ったものを私たちはそしやくし、今後、周りの人々に言葉や行動で伝えていくことが非常に重要だ。長崎を訪れたときの教皇の姿メッセージを語るお顔と声を思い起こし、教皇と同じ思いをもつて「すべてのいのちを守るため」働くキリスト者を目指そう。

3. よい盗賊のように

人々に日々黙々と奉仕するという「殉教」を通して「すべてのいのちを保護し守る文化のために働く弟子」として生きるために、信仰を強め、献身と決意を新たにすることを助けてくれます。

(1) カルワリオは、混乱と不正の場、無力と無理解に加えて、罪なき者の死を前にしてあざける人たちが無関心な陰口をささやく場です。わたしたちも、悔い改めた盗人と同じように、失敗、罪、限界を経験しています。また「自分自身を救ってみろ」と言わせるような怠惰な雰囲気にしばしば陥ります。多くの罪なき者の苦しみを背負うことの意味を忘れてしまうこともあります。

(2) でも、わたしたちは、悔い改めた盗人と同じように、苦しむ罪なきかた、主イエスを弁護し、仕

えるために声を上げて信仰を表明する瞬間を生きたいものです。刑罰を受ける主に寄り添い、見捨てられた孤独な主を支えたいものです。

(3) 十字架上のキリストが与え、献げ、行った愛こそが、あらゆるかたちの憎しみ、利己主義、侮辱、悪質な言い逃れに打ち勝つことができます。その愛こそが、よい行動や選択を滞らせる無頓着な悲観主義や、感覚を鈍らせる物的豊かさに打ち勝つことができます。このことを殉教者に倣って表明しましょう。

教皇訪日のテーマは、「すべてのいのちを守るため」です。これらのメッセージと説教が、そのテーマに沿って生かされ実を結ぶために、共に祈りながら努めてまいりましょう。

★
ほしかげ
★

「キリスト教は、信じるべき真理を守るべき法規禁止事項の『そらいではありません。そうなたら不快です。キリスト教とは、わたしのことをあれほどまでに愛してください、わたしに愛を求めておられる、あのかたのことです。キリスト教とは、キリストのことなのです」(使徒的勧告「キリストは生きている」156)と語り、まさに、その言葉通り、キリストのように生きておられる教皇フランシスコ▲教皇様は、すべての被造物を大切にという精神のもと、自ら質素な生活を率先して行い、貧しい人たちを招いて食事をし、牢獄を訪ねて励まし、また、教会の内部改革も進めておられる▲高齢にもかかわらず分刻みのスケジュールをこなすその姿には、意気込みが感じられる▲待望の来崎当日、朝は曇り。このままの天気だと願うが爆心地公園で待機していると突然の稲妻。雨が降り始め、やがて雷を伴い本降りの雨のうちに教皇様を迎えた。人類の愚かさに対する怒りの雨か、被爆の苦しみを洗い流す雨か▲昼になると雨は上がり日が射してきた。教皇ミサが始まった時には、それまでの天気かうそのように青空が広がってきた。教皇様をお迎えできたこの上ない喜びに加え、目に見えない大きな力を感じ、帰り道、皆の顔は輝いていた▲新しく始まるこの一年、教皇様が身をていして指し示してくださいるキリストへ向かって、新たな心で旅立とう。(良)

2019年11月24日 教皇フランシスコ、長崎での足跡

2018年9月12日に教皇フランシスコが初めて日本訪問の意向を表明して以来、日本の教会はおよそ1年間にわたって公式発表を待ちわびた。19年9月13日の公式発表後、日程が明らかになり、長崎では教皇訪日長崎実行委員会（委員長・中村 満師）を中心に各担当部署が役割を分担して教皇をお迎えする準備を一気に整え、いよいよ当日11月24日（日）を迎えた。教皇は長崎空港に到着後、多くの人々の歓迎を受けながら長崎市内に入られた。爆心地公園では被爆者や行政関係者、子どもたちを含むさまざまな世代の人々を前に「核兵器に関するメッセージ」を発表し、人類の平和の道を訴えた。また、西坂公園では「日本二十六聖人殉教者への表敬」のメッセージを述べ、殉教者たちの信仰の証しと世代を超えて受け継がれた信仰の大切さを励ましとともに伝えた。そして県営野球場・ビッグNスタジアムで、約3万人が集まったミサを司式し、愛と平和を願い祈りをささげた。

朝9時20分頃、教皇を乗せた航空機が長崎空港に到着した。タラップを下りて長崎の地に降り立った教皇は、出迎えた人々からの歓迎を受けた。

平田研長崎県副知事と園田裕史大村市長らの他、カトリック教会からは長崎北地区長で司祭団代表の山脇守師と教区評議会議長の泊光治氏らが教皇を迎え、握手を交わした。続いて信徒の橋口康子さん（水主町教会）と小川仁美さん（植松教会）が花束を贈り、教皇は笑顔で応じていた。その後、教皇は車に乗り込み、20台ほどの車列は空港前の敷地を通過。車道の両側には囲むように集まった多くの人々が日本やアルゼンチン（教皇の出身国）、バチカンの小旗を振って、

長崎空港



©カトリック中央協議会

爆心地公園

9時ごろから降り出した雨は時折雷を伴い本降りになる中、10時15分、教皇を乗せた車が爆心地公園（平和公園 折りのゾーン）中心地区に到着し、中村法道長崎県知事、田上富久長崎市長の出迎えを受けられた。皆の歓迎のうちに原爆落下中心地碑の前まで進まれた教皇は、被爆者2人（下平作江氏、深堀繁美氏）から花輪を受け取り、献花された。中心地碑の脇には被爆十字架も安置されていた。教皇は沈黙のうちに深い祈りをささげられ、およそ2分間、会場は平和への祈りに包まれた。続いて、高校生平和大使の内山洸士郎さん（鎮西学院高校2年）が「長崎誓いの火」から灯したトーチを渡し、教皇はその火から記念碑の前のキャンドルに灯された。

参列者全員で黙とうをささげた後、教皇は核兵器に対して、次のようなメッセージを世界に向けて発信された。

「ここは、核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です」「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。これらは神に齒向かうテロ行為です」「核兵器は、今日の国際的また国家の安全保障への脅威に関してわたしたちを守ってくれるものではない」などと、端的に宣言された。

会場には一昨年教皇がカードにして配られた「焼き場に立つ少年」のパネルも立てられ、写真を撮影したカメラマン、ジョー・オダネル氏の息子タイグ・オダネル氏は教皇に謝意を伝えていた。

最後に被爆者合唱団「被爆者歌う会「ひまわり」」の30人が「もう二度と」（作詞作曲 寺井一通氏）を歌う中、教皇は次の訪問地西坂へと向かわれた。



©カトリック中央協議会

西坂公園

西坂公園では、集まったおよそ900人の修道者・信徒たちが、大粒の雨が降りしきる中、教皇の到着を待っていた。10時45分に教皇を乗せた車が西坂公園に到着すると、皆が歓声とともに立ち上がり、シスターたちによる歌声の中、教皇は日本二十六聖人殉教記念碑へとゆっくり向かわれた。久賀島の牢屋の窄で殉教した潜伏キリシタンの子孫にあたる三世代の家族（外輪保良さん、小島真知子さん、小島楓帆さん）から花輪を受け取った教皇はそれを記念碑の前に献花し、その後、十六聖人の聖遺物に献香した教皇はしばらくその場で沈黙のうちに祈りをささげた。時折、強い風に見舞われ、教皇のスータンもはためいていたが、教皇は少しも動じること



©カトリック中央協議会

なく、参列者たちに対して力強いまなざしを向けたままメッセージを語った。

その中で教皇は、「自らが一人の巡礼者としてこの聖地を訪れたということ」「多くの殉教者たちの苦しみと死によってこの地は聖地となったが、しかしながらこの聖地は死についてではなく命の勝利について語っ

ているということ」「私たちもまた死ではなく神の命との交わりに向かつて呼ばれているということ」「殉教者たちの中で燃えていた福音宣教の熱い思いを共有し、刷新に向かつて困難を乗り越えて行くこと」「世界で信仰のゆえに苦しんでいる人たちと心を合わせ、さらに宗教の名を語るあらゆる不正や、度を越えた利益追求、分断を掲げる政略憎悪を助長するイデオロギーに対して声を上げること」などを語った。

現代世界の価値観と福音の掲げる真の幸い（特に真福八端の道）との違いを強く意識したメッセージだった。

殉教者たちへの敬意と日本の教会に対する励ましに満ちたメッセージに多くの参列者たちが感激した。メッセージが終わると、参列者たちは教皇と一緒に、お告げの祈りをラテン語でさ

さげ、教皇からの祝福をいただいた。一旦、教皇は二十六聖人記念館に立ち寄り、館内で説明を受けられた後、再び参列者たちの所に戻り、その間を通してゆっくりと車へ向かわれた。特に子どもたちに対して格別の配慮を見せながらあいさつをしつつ、また通路で待っていたコレジオ生たちのところでは立ち止まり、少し時間をとって励ましの言葉をかけていた。

参列者の一人は「子どもたちが皆、教皇様に手を置いてもらいました。教皇様のやわらかな表情に本当に感激しました」と語っていた。また、教皇と古くから親交のあるイエズス会のアントニオ・ガルシア修道士も、その後のテレビ取材の中で、「思っていた以上に、親しく言葉を交わすことができて安心した」と語っていた。

その後、教皇を乗せた車は西坂公園を離れ、昼食休憩のため大司教館へと向かった。

長崎大司教館

11時25分に大司教館ロビーに到着された教皇を、小神学生とシスター志願者の27人は、スペイン語「ムイ・ビエンヴェニド（ようこそ）」の言葉と拍手でお迎えした。教皇は一人ひとりに笑顔と握手で応じられ、中には抱擁していただいた学生もいた。

その後、昼食を取られ、部屋に展示された信徒の祈りの折鶴や浦上ゆかりの「ルハンの聖母」をご覧になった。休憩後、1階に展示された浦上潜伏キリシタン遺品のマリア観音とロザリオ（8面に関連記事）の他、子どもたちが描いた教皇の似顔絵にも目を向けられた。

昼食のお世話をしたシスター方が見送る中、教皇はミサの会場へ向かわれた。

教皇フランシスコの日本訪問

2019年11月23日～26日

26日		25日		24日		23日
火		月		日		土
11時35分	11時20分	10時00分	9時45分	7時45分	16時00分	17時40分
航空機にてローマ（フィウミチーノ空港）へ	別れの式	*上智大学への訪問	病氣・高齢の司祭を訪問	イエズス会員と共に朝食およびプライベートな集い	首相との会談、*要人および外交団等との集い	東京国際空港（羽田空港）到着
						歓迎式
						*司教との集い
						航空機にて長崎へ（長崎空港到着9時20分）
						*核兵器に関するメッセージ
						*日本二十六聖人殉教者への表敬
						夕食
						*ミサ
						航空機にて広島へ（広島空港到着17時45分）
						*平和のための集い
						航空機にて東京へ（羽田空港到着21時50分）
						*東日本大震災被災者との集い
						天皇陛下との御会見
						*青年との集い
						昼食
						*ミサ
						東京カテドラル聖マリア大聖堂
						イエズス会員とのプライベートなミサ
						上智大学チャペル
						病氣・高齢の司祭を訪問
						SJハウス
						*上智大学への訪問
						別れの式
						航空機にてローマ（フィウミチーノ空港）へ

*は教皇がメッセージを発信した行事

教皇フランシスコとともに 3万人が愛と平和の祈りささげる

長崎県営野球場

“今日ここで、
わたしたちの信仰と約束を
新たにしたいと思います”

教皇ミサ説教



©カトリック中央協議会

教皇の入場

11月24日(日)午前中の雷雨とはうってかわって晴天となった午後、長崎県営野球場・ビッグスタジアムは、全員着席の13時にはボランティアスタッフ2000人余を含め国内外各地から集まった合計約3万人の人々で埋まった。13時30分、場内アナウンスの直後、教皇が入場。場内には「パパ様を慕う人々の歓声で熱気に包まれた。教皇は専用車「パポモビル」に乗ってフィールドをゆっくりと一周し歓迎を受けられた。時折、赤ちゃんや幼い子どもたちを祝福し、そのたびに歓声が上がった。

ミサ

13時50分、教皇主司式による「訪日教皇ミサ in 長崎」が開祭、「王であるキリストの祭日」の典礼で行われた。祭壇には教皇と共にパチカン随行団、前田万葉枢機卿と日本の司教団、周りに侍者と典礼奉仕者が立ち、200人を超える司祭団が祭壇を囲んだ。内陣には被爆マリア像が安置され教皇により献香が行われた。約900人の聖歌隊が「会衆を誘い込むように一緒に歌う気持ち(関係者談)」で丁寧に、素朴でなじみのある聖歌を響かせた。ミサは日本語とラテン語で進められ、福音朗読は手話を交えて行われた。教皇は説教台に着き、スペイン語で語られた。

「イエスよ、あなたのみ国においていくなるときには、わたしを思い出してください(ルカ23:42)」イエスと共に十字架につけられた犯罪人の言葉は、他の大勢が嘲笑する中であって、盗人の信仰宣言であり、イエスが聞いた最後の言葉だった。

「今日ここで、わたしたちの信仰と約束を新たにしたいと思います。あの悔い改めた盗人と同じく、わたしたちは、失敗、罪、限界ばかりの人生をよく分かっています。けれどもそれが、わた

したちの現在と未来を既定し、決定づけるものであってほくありません」

教皇は、日本について「人間が手にしうる壊滅的な力を経験した数少ない国の一つ」とし、「親愛なる兄弟姉妹の皆さん。長崎はその魂に、いやしがたい傷を負っています。その傷は、多くの罪なき者の、筆舌に尽くしがたい苦しみによるしるしです。(中略)今日、一つの祈りとして、わたしたちも声を上げましょう。今日、この恐ろしい罪を、身をもって苦しんでいるすべての人のために。そして、あの悔い改めた盗人のように、黙りも嘲笑もせず、むしろ、自ら声を上げ、真理と正義、聖性と恵み、愛と平和のみ国を告げ知らせる者が、もともとと増えるよう願いましょう」と語った。共同祈願は多言語でささげられ、教皇のため(スペイン語)、国政に携わる人々のため(韓国語)、困難の中にある人々のため(タガログ語)、日本におけるキリスト者のため、召命のため(日本語)、平和のため(ベトナム語)に唱えられた。ご聖体は、赤い傘の位置を目印に信徒が司祭のもとに集まり、拝領。スタンド席は一部を除いてミサ後に聖体拝領が行われた。

閉祭

ミサの終わりに、日本カトリック司教協議会会長として高見三明大司教が教皇フランシスコに謝辞を述べた。

爆心地公園から全世界へ向けての核廃絶と平和の強いメッセージ、殉教地・西坂巡礼所ではキリスト信者の信仰を鼓舞し、宣教へと駆り立て大きな励ましと希望を与えてくださったこと、このミサを通しての恵みと気づきを述べ、教皇への感謝とともにこれからの訪問の安全と実りを願って締めくくった。最後に教皇から、来崎の記念のしるしとして、高見大司教にカリスが贈られた。

行事参加者 皆さんの声

2019.11.24

感想を寄せてくださったすべての皆様に感謝します。

★歓声の先に目をやると、教皇様のお姿が。38年前は雪で、今回は雷と雨のち晴天。生涯で2度も教皇ミサに参列し、スタツフとしてお手伝いできたことに感謝しました。言葉は違えど心は同じ。世界が平和になりますように、心から祈りました。

滑石教会 川崎尚子

★「全能の神と…」教皇様が日本語でミサを始めた瞬間、涙が止まらなくなりました。最近疎遠だったものの、幼い頃から培ってきた信仰心が弾けた瞬間だったと思います。一生忘れられない感動的なミサになりました。

中町教会 小濱孝行

★2019年11月の記憶を忘れません。教皇ミサ翌日、「先生！信徒ではない私も、子どもを抱擁される教皇様のお姿を拝見して熱いものが込み上げました」との声を聞きました。「すべてのいのちをまもるため」来日された教皇の想いを神に感謝しました。

イエスのカリタス修道女会

シスター中尾 美恵子

★教皇様が西坂の地で、「日本の殉教者に会いに来た」とおっしゃった時、二十六聖人と今の日本の教会が、つながった気がしました。教皇様とお告げの祈りを通して聖ペトロ・パブチスタに「日本にフランシスコ会の管区あるよ！」と言って感無量でした。

フランシスコ会 修練者
大石 真理
(横浜教区・清水教会)

★西坂にて受付と同時に雨が降り出し、それから席に座って待つこと2時間、まさか教皇様に握手していただき手の温もりを感じることができるとは思いもしませんでした。これを機会にこの先教皇様のご意向に沿う行動ができますように。

田平教会 田川 豊明

当日はあいにくの雨となっていましたでしたが、教皇様は終始笑顔で私たちに手を振ってくださいました。握手していただき、そのおかげで今までの疲れや寒さも忘れて、とても幸せな気持ちになることができました。教皇様のスピーチがとても心に響きました。

田平教会 田川 天舞音
(父娘で西坂の行事に参列)

★私たち、被爆者歌う会ひまわりが4年前ローマで歌えなかった曲『もう二度と』を、今回ここ被爆地長崎で教皇様をお迎えして歌えたことは、この上ない喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。握手してくださったそのお顔。イエス様にお会いできたようで大きなお恵みでした。教皇様と共に核廃絶のために毎日お祈りしたいと思っています。

三ツ山教会 田川 代枝子

★私はミサの侍者奉仕をさせていただきました。教皇様と共に内陣に上がり、教皇様のすぐ近くでミサに与ることができたことは大変光栄なことでした。人生で一番緊張した侍者奉仕となりましたが、無事に務めを果たすことができました。感無量です。

大神学生 哲学科1年
窄口 歩(城山教会)

★私の信仰生活はイバラの道でした。現代においても宗教の自由とわれながらも自由にならない時がありました。自分の信仰の弱さを認めながら、今こうして教皇ミサに参加できたことに感謝したいと思います。最後に教皇様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

水ノ浦教会 富田 邦子



教皇フランシスコ 長崎でのスピーチ全文

2019 年 11 月 24 日

教皇のスピーチ

核兵器についてのメッセージ

長崎・爆心地公園

愛する兄弟姉妹の皆さん。

この場所は、わたしたち人間が過ちを犯しうる存在であるということを、悲しみと恐れとともに意識させてくれます。近年、浦上教会で見いだされた被爆十字架とマリア像は、被爆なされたかたとそごご家族が生身の身体に受けられた筆舌に尽くしがたい苦しみ、あらためて思い起こさせてくれます。

人の心にあるもつとも深い望みの一つは、平和と安定への望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有することは、この望みに対する最良のこたえではありません。



献花し祈る教皇フランシスコ ©カトリック中央協議会

この心にあるもつとも深い望みの一つは、平和と安定への望みです。核兵器や大量破壊兵器を所有することは、この望みに対する最良のこたえではありません。核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡張競争に反対する声は、小さくともつねに上がっています。軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活強いられしています。しかし、武器の製造、改良、維持、商に財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いつそう破壊的になっていきます。これらは神に歯向かうテロ行為です。

核兵器から解放された平和な世界。それは、あらゆる場所で、数え切れないほどの人が熱望しています。核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です。そして、軍備拡張競争に反対する声は、小さくともつねに上がっています。軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。本来それは、人々の全人的発展と自然環境の保全に使われるべきものです。今日の世界では、何百万という子どもや家族が、人間以下の生活強いられしています。しかし、武器の製造、改良、維持、商に財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いつそう破壊的になっていきます。これらは神に歯向かうテロ行為です。

カトリック教会としては、人々と国家間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは、神に対する、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際的な法的原則に則り、たゆむことなく、迅速に行動し、訴えていきます。昨年の 7 月、日本司教協議会は、核兵器廃絶の呼びかけを行いました。また、日本の教会では毎年 8 月に、平和に向けた 10 日間の平和旬間を行っています。

どうか、祈り、一致の促進の飽くなき探求、対話への粘り強い招きが、わたしたちが信を置く「武器」でありますように。また、平和を真に保証する、正義と連帯のある世界を築く取り組みを鼓舞するものとなりますように。

核兵器のない世界が可能であり必要であるという確信をもって、政治をつかさどる指導者の皆さんにお願いします。核兵器は、今日の国際的な国家の安全保障への脅威に關してわたしたちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください。人道的および環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考えなくてはなりません。核の理論によって促される、恐れ、不信、敵意の増幅を止めなければなりません。今の地球の状態から見ると、その資源がどのように使われるのかを真剣に考察することが必要です。複雑で困難な持続可能な開発のための 2030 アジェンダの達成、すなわち人類の全人的発展という目的を達成するためにも、真剣に考察しなくてはなりません。1964 年に、すでに教皇聖パウロ 6 世は、防衛費の一部から世界基金を創設し、貧しい人々の援助に充てることを提案しています（「ムンバイでの報道記者へのスピーチ」1964 年 12 月 4 日）、回勅「ポプロールム・プログレッシオ」1967 年 3 月 26 日」参照。

こういつたことすべてのために、信頼関係と相互の発展とを確かなものとするための構造を作り上げ、状況に対応できる指導者たちの協力を得ることが、きわめて重要です。責務には、わたしたち皆がかかわっていますし、全員が必要とされています。今日、わたしたちが心を痛めている何百万という人の苦しみに、無関心でいてよい人はいません。傷の痛みを叫ぶ兄弟の声に耳を塞いでよい人はいどこにもいません。対話することのできない文化による破壊を前に目を閉ざしてよい人はどこにもいません。心を改めることができるよう、また、いのちの文化、ゆるしの文化、兄弟愛の文化が勝利を収めるよう、毎日心を一つにして祈ってくださいようお願いします。共通の目的地を目指す中で、相互の違いを認め保証する

教皇のスピーチ

殉教者への表敬

殉教の記念碑 長崎・西坂の丘



©カトリック中央協議会

愛する兄弟姉妹の皆さん、こんにちば。

わたしはこの瞬間を待ちわびていました。わたしは一巡礼者として祈るため、信仰を確かめるため、また自らのあかしと献身で道を示すこの兄弟たちの信仰に強められるために来しました。歓迎に心から感謝いたします。

る兄弟愛です。

ここにおられる皆さんの中には、カトリック信者でないかたもおられることでしょう。でも、アッシジの聖フランシスコに由来する平和を求める祈りは、私たち全員の祈りとなると確信しています。

主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。

憎しみがあるところに愛を、いさかきがあるところにゆるしを、疑いのあるところに信仰を、絶望があるところに希望を、闇に光を、悲しみあるところに喜びをもたらすものとしてください。

記憶にとどめるこの場所、それはわたしたちをハッとさせ、無関心でいることを許さないだけでなく、神にもっと信頼を寄せるよう促してくれます。また、わたしたちが真の平和の道具となつて働くよう勧められています。過去と同じ過ちを犯さないためにも勧められているのです。皆さんとご家族そして、全国民が、繁栄と社会の和の恵みを享受できますようお祈りいたします。

この聖地にいると、はるか昔に殉教したキリスト者の姿と名が浮かんできます。1597 年 2 月 5 日に殉教したパウロ三木と同志殉教者をはじめ、その苦しみと死によってこの地を聖なる地とした、あまたの殉教者です。

しかしながら、この聖地は死についてよりも、いのちの勝利について語りかけます。聖ヨハネ・パウロ 2 世はこの地を、殉教者の丘としてだけでなく、まことの真福八端の山と考えました。自己中心、安穩、虚栄から解き放たれ、聖霊に満たされた人々のあかしに触れることができる場です（使徒的勧告「喜びに喜べ」65 参照）。ここで、迫害と剣に打ち勝った愛のうちに、福音の光が輝いたからです。

に丁重に納められ尊ばれる過去の手柄の輝かしい遺物にとどまるのではなく、その愛が、福音宣教の熱い思いを刷新し絶えることなく燃え立たせる、この地におけるすべての使徒的精神の、生き生きとした記憶と燃える熱意になりますように。今の日本にある教会が、すべての困難と展望を含め、十字架の上から放たれた聖パウロ三木のメッセージに日々耳を傾け、道、真理、いのち（ヨハネ 14・6 参照）である福音の喜びと美をすべての人と分かち合うよう招かれていることを感じますように。わたしたちに重くのしかかり、謙遜に、自由、大胆に、思いやりをもって歩むことを妨げるものから、日々解き放たれますように。

ここは何よりも復活を告げる場所です。襲いくるあらゆる試練の中でも、最後は死ではなく、いのちに至ると宣言しているからです。わたしたちは死ではなく、完全な神聖のいのちに向かって呼ばれているのです。彼らは、そのことを告げ知らせたのです。確かにここには、死と殉教の間があります。ですが同時に、復活の光も告げ知らされています。殉教者の血は、イエス・キリストがすべての人に、わたしたち皆に与えたいと望む、新しいいのちの種となりました。そのあかしは、宣教する弟子として生きるわたしたちの信仰を強め、献身と決意を新たにします。日々黙々と務める働きによる「殉教」を通して、すべてのいのち、とくにもつとも助けを必要としている人を保護し守る文化のために働く弟子として。

わたしは殉教者にささげられた記念碑の前まで来たのは、このような聖なる人々と会うためです。「地の果て」に生まれた若いイエズス会士の謙虚さに心を重ね、最初の宣教師と日本の殉教者の歴史に、靈感と刷新の深い泉を見いだしたかったのです。すべてをささげた彼の愛を忘れないようにしましょう。記念館

教皇の説教

王であるキリストの祭日のミサ
長崎県営球場
（ビッグNスタジアム）



©カトリック中央協議会

「イエスよ、あなたのみ国においてになるときは、わたしを思い出してください」

（ルカ23・42）

典礼暦最後の主日の今日、イエスとともに十字架につけられ、イエスが王だと気づき、そう宣言した犯罪人の声に、わたしたちも声を合わせます。栄光と勝利には程遠いそのときに、嘲笑と侮辱の声高な叫びの中で、あの盗人は声を上げ、信仰を宣言しました。それは、イエスが聞いた最後のことであり、御父に自分をゆだねる前、イエスは最後にいました。はつきりいつておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる（ルカ23・43）。盗人の後ろ暗い過去は、一瞬にして新たな意味を得たかのようです。すなわち、主の苦悶にしっかりと寄り添い、いつてもどこにおいても救いを差し出すという主の生き方を確かめるものとしたのです。カルワリオ、それは無秩序と不正義の場、無力と無理解が相まみえ、罪なき者の死の前で、いつも茶化している者たちの、無関心で自己を正当化する、ささやきと陰口が響く場です。カルワリオ、この語は、この悔い改めた盗人の姿勢によって、全人類にとつての希望という語に変わるのです。苦しむ罪なき人への自分自身を救えというあざけりやわめき声は、決めぜりふにはならず、むしろ、歴史を作るまことの形として、心を動かされるに任せ、いつくしみによって決断する者たちの声と呼び起こすのです。

今日ここで、わたしたちの信仰と約束を新たにしたいと思います。あの悔い改めた盗人と同じく、わたしたちは、失敗、罪、限界ばかりの人生をよく分かっています。けれどもそれが、わたしたちの現在と未来を既定し、決定づけるものであってほしくありません。わたしたちは、「自分自身を救ってみろ」という軽々しい無関心の声で、面倒を避ける空気に染まりがちなことを知っています。多くの罪なき者の苦しみを、ともに背負うことの大切さを忘れてしまうことも少なくありません。この国は、人間が手にしうる壊滅的な力を経験した数少ない

い国の一つです。ですからわたしたちは、悔い改めた盗人と同じように、苦しむ罪なきかた、主イエスを弁護し仕えるために、声を上げ、信仰を表明する瞬間を生きたいのです。主の苦しみに寄り添い、その孤独と放棄を支えたいと思います。そして今一度、救いそのものである、御父がわたしたち皆に届けようとするあのことを聞きましょう。あなたは今わたしと一緒に樂園にいる。」

救いと確信。それは、聖パウロ三木と同志殉教者、そしてあなたがたの霊的遺産に刻まれた無数の殉教者、彼らがそのいのちをもつて勇猛にあかしてきたものです。わたしたちは彼らの足跡に従い、その一步一步を同じように、勇気を携えて歩みたいと思います。十字架上のキリストから与えられ、渡され、約束された愛こそが、あらゆるたぐいの憎しみ、利己心、嘲笑、言い逃れを打ち破るのです。そこに、よい行動や選択の前にして身をすくませる、無意味な悲観主義や、感覚を鈍らせる物的豊かさに、ことごとく勝利する力があります。第2バチカン公会議は、そのことを思い出させてくれました。真理から遠いのは、この世には永遠の都はないといつて、来る都を探し求めているつもりで地上での務めをないがしろにし、注意を怠る人です。まさに、告白する同じ信仰で、神に呼ばれた召し出しの崇高さを示し、それが透けて見えるほどにすべきなのです（第2バチカン公会議『現代世界憲章』43参照）。

わたしたちの信仰は、生きる者たちの神への信仰なのです。キリストは生きておられ、わたしたちの間で働かれ、わたしたち皆をいのちの充滿へと導いておられます。キリストは生きておられ、わたしたちに生きる者であつてほしいと願つておられるのです。キリストはわたしたちの希望です（使徒的勧告『キリストは生きている』1参照）。わたしたちは毎日こう祈っています。主よ、み国が来ますように。こう祈りながら、自分の生活と活動が、賛美となるよう願つています。宣教する弟子としての使命が、来るべきものの証言者や使者となることならば、わたしたちは、悪や悪行に身を任せてはいられません。反対にその使命は、神の国のパン種になるよう駆り立てるのです。家庭、職場、社会、どこであれ置かれた場所でパン種となるよう駆り立てるのです。聖霊が人々の間に希望の風として吹き続けるための、小さな通気口となることです。天の国は、わたしたち皆の共通の目的地です。それは、将来のためだけの目標ではありません。それを請い願ひ、今日からそれを生きるのです。病気や障害のある人、高齢者や見捨てられた人た



教皇フランシスコ
広島でのスピーチ全文

2019年11月24日

教皇のスピーチ

広島・平和記念公園

「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（詩編122・8）。

あわれみの神、歴史の主よ、この場所から、わたしたちはあなたに目を向けます。死といのち、崩壊と再生、苦しみといつくしみの交差するこの場所から。

ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によつて跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれ

ち、難民や外国からの労働者、彼らを取り囲んで大抵は黙らせる無関心の脇で、今日それを生きています。彼らは皆、わたしたちの王、キリストの生きる秘跡なのです（マタイ25・31、46参照）。なぜなら「もしわたしたちが本当にキリストの観想によつて出発したのであれば、あのかたがご自分を重ねたいと望んだ人たちの顔に、あのかたの姿を見いださなければならぬ」（聖ヨハネ・パウロ2世使徒的書簡『新千年期の初めに』49）からです。

あの日、カルワリオでは、多くの人が口を閉ざしていました。他の大勢は嘲笑し、盗人の声だけがそれに逆らい、苦しむ罪なきかたを擁護できたのです。それは、勇気ある信仰宣言です。わたしたち一人ひとりが決断することです。沈黙か、嘲笑か、あるいは告げ知らせるか。親愛なる兄弟姉妹の皆さん。長崎はその魂に、いやしがたい傷を負っています。その傷は、多くの罪なき者の、筆舌に尽くしがたい苦しみによるしるしです。これまでの戦争によつて踏みにじられた犠牲者たちは、さまざまな場所で勃発している第3次世界大戦によつて、今日もなお苦しんでいます。今ここで、一つの祈りとして、わたしたちも声を上げましょう。今日、この恐ろしい罪を、身をもつて苦しんでいるすべての人のために。そして、あの悔い改めた盗人のように、黙りも嘲笑もせず、むしろ、自ら声を上げ、真理と正義、聖性と恵み、愛と平和のみ国を告げ知らせる者が、もっとも増えるよう願ひましょう。

ました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、なかには、異なる言語を話す人たちもいました。そのすべての人が、同じ運命によつて、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました。

この場所のすべての犠牲者を記憶にとどめます。また、あの時を生き延びたかたがたを前に、その強さと誇りに、深く敬意を表します。その後の長きにわたり、身体の激しい苦痛と、心の中の生きる力をむしばんでいく死の兆しを忍んでこられたからです。

わたしは平和の巡礼者として、この場所を訪ねなければならぬと感じていました。激しい暴力の犠牲となつた罪のない人々を思い出し、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じつと祈るためです。とくに、平和を望み、平和のために働き、平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望みです。わたしは記憶と未来にあふれるこの場所に、貧しい人たちの叫びも携えて参りました。貧しい人々はいつの時代も、憎しみと対立の無防備な犠牲者だからです。

わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です。それは、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を世話する能力の著しい欠如、また、あたかもそれで未来の平和が保障されるかのように行われる、継続的あるいは突発的な武力行使などに対する声です。

確信をもつて、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです。これについて、わたしたちは裁きを受けることとなります。次の世代の人々が、わたし

たちの失態を裁く裁判官として立ち上がるでしょう。平和について話すだけで、国と国の間で何の行動も起こさなかったと。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるでしょうか。差別と憎悪のスピーチで、あのだれもが知る偽りの行為を正当化しておきながら、どうして平和について話せるでしょうか。

平和は、それが真理を基盤とし、正義に従つて実現し、愛によつて息づき完成され、自由において形成されないものであれば、単なる「発せられることば」に過ぎなくなると確信しています。（聖ヨハネ23世回勅『バーチウム・イン・テリス―地上の平和』37〔邦訳20〕参照）。

真理と正義をもつて平和を築くとは、「人間の間には、知識、徳、才能、物質的資力などの差がしばしば著しく存在する」（同87〔同49〕）を認めることです。ですから、自分だけの利益を求めるため、他者に何かを強いることが正当化されてよいはずはありません。その逆に、差の存在を認めることは、いっそうの責任と敬意の源となるのです。同じく政治共同体は、文化や経済成長といった面ではそれぞれ正当に差を有していても、「相互の進歩に対して」（同88〔同49〕）、すべての人の善益のために働く責務へと招かれています。

実際、より正義にかなう安全な社会を築きたいと真に望むならば、武器を手放さなければなりません。「武器を手にしたまま、愛することはできません」（聖パウロ6世『国連でのスピーチ』1965年10月4日）10。武力の論理に屈して対話から遠ざかつてしまえば、いっその犠牲者と魔壺を生み出すことが分かっていながら、武力が悪夢をもたらすことを忘れてしまうのです。武力は「膨大な出費を要し、連帯を推し進める企画や有益な作業計画が滞り、民の心理を台なしにします」（同）。紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるでしょうか。この底知れぬ苦しみ、決して越えてはならない一線を自覚させてくれますように。真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、「平和は単に戦争がないことでもな（く）、……たえず建設されるべきもの」（第2バチカン公会議『現代世界憲章』78）です。それは正義の結果であり、発展の結果、連帯の結果であり、わたしたちの共通の家の世話の結果、共通善を促進した結

果生まれるもののなのです。わたしたちは歴史から学ばなければなりません。

思い出し、ともに歩み、守ること。この三つは、倫理的命令です。これらは、まさにここの広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあつてはなりません。記憶は、より正義にかなひ、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための、保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。わけても国々の運命に対し、今、特別な役割を負っているかたがたの良心に訴えるはずでです。これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。

だからこそわたしたちは、ともに歩むよう求められているのです。理解とゆるしのまなざしで希望の地平を切り開き、現代の空を覆うおびただしい黒雲の中に、一条の光をもたすのです。希望に心を開きましょう。和解と平和の道具となりましょう。それは、わたしたちが互いを大切にし、運命共同体で結ばれていると知るなら、いつでも実現可能です。現代世界は、グローバル化で結ばれているだけでなく、共通の大地によつても、いっも相互に結ばれています。共通の未来を確実に安全なものとするために、責任をもつて闘う偉大な人となるよう、それぞれのグループや集団が排他的利益を後回しにすることが、かつてないほど求められています。

神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によつて、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらない！ 兵器の轟音はもういらない！ こんな苦しみはもういらない！

と。わたしたちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和が来ますように。神よ、あなたは約束してくださいました。「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（詩編85・11・12）。

主よ、急いで来てください。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。平和の君である主よ、来てください。わたしたちをあなたの平和の道具、あなたの平和を響かせるものとしてください！

「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」（詩編122・8）。

すべてのいのちを守るため



写真すべて ©カトリック中央協議会

「バチカン・ニュースから抜粋」 教皇、離日後、 機内で記者会見



違いは、長崎はキリスト教が古くから根付き、激しい迫害があったこと、と話した。一方、広島はキリスト教的な都市ではないが、残酷とはどういうものであるか真に人類に教える場所と話した。

教皇は、今回の訪問で「核兵器の使用は倫理に反する」と強調したことを振り返り、倫理に反するがゆえにこれはカトリック教会のカテキズムにも加えられるべきこと、との考えを述べた。また、核兵器の使用のみならず保有も倫理に反すると述べた教皇は、それは、事故や、ひとりの狂気が人類を滅ぼすこともあるからだ、と語った。

11月26日、タイと日本への訪問を終え、帰国の途につかれた教皇フランシスコは、特別機の機内で、随行者の記者団の質問に答えられた。この記者会見で、多くの質問が主に日本およびアジア、また核や平和に関連するテーマに集中した。

「西洋の社会と教会は、東洋のそれらから学ぶことがあるか」という質問に、教皇は「*ex Oriente, ex Occidente lux*」(「光は東方より、光は西方より」)という古代理ローマの箴言をもじった言葉(箴言)を引用。光は東方からだが、贅沢、消費主義は西方から来る、と述べた。東方にはまさに知恵がある、それは単なる知識上の知恵ではなく、時間や観想の知恵であり、常に急いでいる西洋社会に対し、観想を学ばせ、立ち止まり、物事を詩的に見ることを教えてくれる、と語られた。

また、東洋は物事を超えた彼方を見つめる力があり、「超絶性」という言葉をあえて使うことなく、内在性の限界を超えるビジョンを持っている、と話された。教皇は、西洋人は少し立ち止まり、叡智のために時間を割く、と述べた。

「長崎と広島を訪問して何を感じたか」という問いに、教皇は、長崎と広島はどちらも原爆で苦しんだ、と述べつつ、一つの

「長崎と広島を訪問して何を感じたか」という問いに、教皇は、長崎と広島はどちらも原爆で苦しんだ、と述べつつ、一つの

お知らせ この記事の全文は「バチカン・ニュース」のサイトに掲載されています。また教皇訪日中の全メッセージは「カトリック中央協議会」のサイトで読むことができます。

信仰の記憶がこれからの歩みを 支え導いてくださるように

教皇訪日長崎実行委員会
委員長 中村 満



38年ぶりの教皇来崎の恵みを振り返ると、まず「神に感謝」と言わざるを得ない。来崎の実現と日程の無事終了、多くの方々の協力を。爆心地や西坂は大雨の中の訪問だったが、沈黙の中、首を垂れ祈るババ様の姿には心を揺さぶられた。教皇ミサ時には晴天になり、約3万人に非常に協力的であった。また、ボランティアの皆様に感謝。約2千名のボランティアのサポートがあつてこそ全体を運営することができた。中でも救護チームには50余名のドクター、160余名のナースが協力し、対応してくれた。ボランティアの方々には、雨の中での奉仕で大変なご苦労をかけたと思つてゐる。さらに、長崎電気軌道をはじめとする各交通機関の方々に感謝。3万人の移動がスムーズだったのは各社の協力のおかげといえる。それから、長崎県警に感謝。安全対策、交通規制、渋滞防止などさまざまな対応をしてくださつた。今回の教皇来崎に関わつてくださった全ての方々に心から感謝申し上げます。

同時に訃告を申し上げ、ゆるしを請うべきことが多々あつた。入場証の発送に手間取つたこと、当日の案内誘導がスムーズでなかったこと。特にトイレの数が不足していたこと等々。準備不足で大変ご迷惑をおかけいたしました。

教皇来崎に関し、皆様の祈りに支えられ教皇様をお迎えできたことを衷心より感謝申し上げます。信仰の記憶がこれからの歩みを支え導いてくださいますように。皆様、本当にありがとうございます。

教皇来崎に合わせて特別観覧

潜伏キリシタン遺品

里帰り



リシタン遺品について、同教会が「特別観覧」を申請し、同博物館の理解と協力によって実現したもの。展示品は浦上三番崩れ関係遺品のマリア観音像(円内の写真、帳方吉蔵旧蔵)と浦上四番崩れ関係遺品であるロザリオ・十字架・メダイの計5点で、2日間、信者ら約650人が鑑賞した。

同教会にとっては、潜伏・迫害時代を生きた祖の信仰を守り通した先祖たちの思いに触れる機会でもあった。この一時の里帰りにあたり、潜伏キリシタンが隠し持っていた遺品が「祝福されて

教皇フランシスコの来崎に合わせて、11月25日(月)と26日(火)浦上教会被爆マリア小聖堂を会場に潜伏キリシタン遺品の「特別観覧」が開催された。これは、東京国立博物館が所蔵するキ

人事異動・任命

(一)内は前任地

- ▼教区(12月1日付)
山内 清海師 引退 (お告げのマリア修道会付き)
- ▼コンベンツアル聖フランシスコ修道会(12月1日付)
崎濱 宏美師 東長崎教会協力司祭 (聖母の騎士修道院)
- キム・ヒール師
聖母の騎士修道院(鹿児島・奄美修道院)

山内清海師引退



58年間にわたり司牧と神学生養成に尽力されたミカエル山内清海師が、昨年12月1日付で引退された。これまでの奉仕に感謝を表し、これからの健康を祈りたい。引退後は、大司教館へ。

略歴 1935年9月28日平戸市生まれ。田平教会出身。61年5月27日カナダ・モントリオールで司祭叙階。ローマ・聖トマス大学卒業後、64年89年福岡サン・スルピス大神学院(当時)哲学教授(75年85年大神学院院長兼任)、89年大神学院長兼任、92年からお告げのマリア修道会付き司祭。2010年まで長崎純心大学・大学院教授を務めた。

教皇から祝福の証し



「いないであろう」ことから、久志利津男主任司祭らによって遺品の祝福も行われた。

前日24日(日)には大司教館に置かれ、来崎中の教皇も鑑賞された。

新聞の見出しあれこれ



©カトリック中央協議会

11月24日(日)教皇ミサ終了後、会場周辺では長崎新聞の号外が配られた(写真)。訪日中は連日、教皇に関するニュースが紙面の見出しを飾つた。

24日▼ローマ教皇来崎「核なき世界は可能」／語り掛ける平和と祈り(長崎新聞号外)

25日▼核兵器のない世界は可能が必要 長崎・広島で訴え(毎日)▼教皇核廃絶「可能」長崎から行動訴え 軍拡「テロ行為」と非難(長崎)▼教皇「核は我らを守らず」(日経)

26日▼教皇祈り被災地に次世代に5万人ミサ

謹賀新年

二〇二〇年

大司教 高見 三明(47)	久志利津男(34)浦上	山口竜太郎(14)出津
補佐司教 中村 倫明(31)	高野 治(34)大野	鶴巻 健二(14)木鉢小瀬戸
原塚 正人(69)諫早市	福島 光明(30)植松	汐留 義和(13)浜
下川 英利(59)長崎市	眞浦 健吾(30)青方丸尾	熊谷 裕司(13)小神学院
山内 豊(59)平戸市	中濱 敬司(30)セント	谷脇 誠一郎(12)根
山内 清海(58)大司教館	紙崎 新一(29)浅子	山添 克明(11)曾
下村 徹(57)原爆ホーム本館	平本 義和(29)長	野濱 達也(11)真手ノ
村中 司(57)長崎市	葛嶋 秀信(29)中	岩下 裕志(10)山
峰 徳美(57)	中濱 繁喜(29)西	中尾 直通(9)深
三村 誠一(56)大	鍋内 正志(28)平	大水 満(7)褥
平野 勇(56)鹿子前	山村 憲(28)平	中野 健一郎(6)大司教館
野下 千寿(56)セント	岩崎 晋吾(27)諫早	小島 明(4)滑
堤 好治(56)聖マルコ園	下野 英知(27)大	稲田 伸也(4)イタリ
宮川 俊行(56)	湯浅 俊治(25)大	キム・ボム(1)江
小島 栄(55)大司教館	浅田 照明(25)太	宮原 大地(新浦上)
萩原 助(53)香	大水 文隆(25)中央協議会	●イェズス会 泉 類治(56) 日本二十六聖人修道院 ドメニコ・ヴィタリ(49) 日本二十六聖人記念館
川上 忠秋(52)大司教館	辻原 達也(24)小	●修道士会など テンプルティウス・ヘリ(21) 聖ルドヴィコ神学院 ペトロ・トラン・ドユック・
片岡 清(51)五島市	川原 拓也(24)桐	荒田 啓示(新) 聖ルドヴィコ神学院
濱崎 靖彦(51)神	山本 聡史(23)小神学院	●マリア会 坪光 正躬(48)海星修道院 末吉 克久(47)
長谷 功(51)聖マルコ園	中島 誠志(22)三浦町、天神	●サレジオ修道会 ソボン・タデウス(34) イエスのカリタス
橋本 勲(50)黒	山田 良秋(21)三ツ	前田 崇史(16)愛野
山川 忠(50)大	川口 昭人(21)水主	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
下口 勲(47)大	岡 秋美(21)時	●韓国殉教者聖職修道会 キム・ドンウク(9)奈留
大山 繁(46)黒	熊川 幸徳(20)イタリ	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
松本 光男(44)上	大瀬良直人(20)三井、貝津	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
小瀬 明(44)青砂ヶ	竹内 英次(19)福岡、二日市	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
村川 昌彦(43)八幡	岩本 繁幸(18)セント	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
山内 実(42)相	尾高 修一(18)浦上	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
諸岡 清美(42)	川原 昭也(18)宝	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
岩村 知彦(38)鮑の浦	葛島 輝義(17)中	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
鳥山 邦夫(38)馬	工藤 秀晃(17)浦	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
古栗 馨(38)大司教館	山脇 伸也(17)神	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
山脇 守(37)滑	竹谷 誠(16)大	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
中村 満(35)島	前田 達也(16)大司教館	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)
岩崎 康彦(35)佐々	本田 靖彦(16)仲	●オプス・デイ 木村 昌平(16)長崎 恵介(6)

頭ヶ島教会 100 年祝う

信仰の遺産を受け継いで



のごつごつした外観で、頑なな一面を彷彿させる。決してスマートではないが、どっしりとした重厚さを保っている。

昨年 11 月 11 日 (月) 心配された前日の雨もあがり、秋晴れとなった。この日、頭ヶ島には献堂 100 周年を祝うため、150 名ほどが集まりミサがさげられた。その中には島の住人をはじめ、頭ヶ島出身の方々、シスター、司祭、高見三司教、中村倫明補佐司教、そして新上五島町長と役場の方々も参加した。頭ヶ島天主堂は石造り

しかしその内装は繊細で華やかな表情をもっており、光輝いているかのようだ。この教会の石の一本一本を信徒が切り出し、建築家鉄川与助が魂を込めて仕上げた渾身の教会といえる。2018 年、世界遺産に登録されたばかりの「頭ヶ島教会と集落」は観光地としても注目を浴び、年間 4 万人が訪れている。しかし純粋な頭ヶ

主にささげる思いを新たに

祭壇奉仕者選任式―教区

昨年 10 月 19 日 (土)、宝亀小教区中野教会で選任式が行われ、同教会出身の鼈甲屋賢治神学生が祭壇奉仕者となった。

選任式ミサには、司式した高見三司教、中村倫明補佐司教、平戸地区司祭団、長崎カト



リック神学院、教区内外の司祭と、堂内を埋め尽くす 150 人以上の修道者、信徒が集まった。「中野巡回教会始まって以来」と喜びを表現する人もいた。高見三司教は説教の中で、「初代教会時代から、役割を与えられて活躍した信徒がいました。次第に聖職者に向かう人に任務は与えられるようになりましたが、本来は信徒の仕事でした。信徒の皆さんも、みことばへの奉仕侍者など祭壇への奉仕に積極的に関わってください。鼈甲屋神学生は、聖職者になる直前の段階、祭壇奉仕者を受けることになりました。イエス様が自分を与え尽くした御聖体に奉仕します。良き奉仕ができるよう、祈りましょう」と招いた。選任された神学生は、盛大な拍手を受けた。

島の島民は 6 世帯 11 人を残すのみとなった。先祖から託された信仰の遺産を受け継ぎ、教会と共に 100 年を生き抜いた歴史の証人、古強者達です。彼らこそ本当の意味で世界遺産なのです。(主任司祭 川内和則)

焼崎 50 年・猪ノ浦 30 年

献堂の節目を祝う記念ミサ



記念ミサが 11 月 10 日 (日)、高見三司教、中村倫明補佐司教の司式により、焼崎教会で行われた。焼崎教会は 1950 年に初代教会が誕生し、69 年に再建され今日に至る。猪ノ浦教会は 47 年最初の教会が建てられ、当初は大曾小教区の神父が月に一度ミサに来ていた。老朽化に伴い、89 年に二代目の聖堂が建立。焼崎教会、猪ノ浦教会共に 75 年、真手ノ浦小教区に併合された。両教会とも都会の喧騒からは離れた静寂の地に佇む教会であるが、過疎化、少子高齢化などの波は顕著に現れ、信徒数は二教会合わせても 50 人ほどであるため、今後の課題も多い。信者らは「それでも信徒の心が心を合わせ、これまで教会を支えてくださった信仰の先人たちの感謝を祈り、今自分ができることへの決意を新たに教会を大切にしていこう」と誓った。

真手ノ浦で祝福とミサ

ステンドグラス設置を記念

11 月 9 日 (土)、ステンドグラス祝福式と記念ミサが真手ノ浦教会で行われた。真手ノ浦教会は 1910 年に現在地のすぐ近くに最初の教会が建立。56 年に現在地に建てられた教会は 2010 年に改築された。これまで現聖堂には色付き無地のアクリル板が貼られていたが、ステンドグラスの設置を望む声があり、協議を重ねてきた。そして 19 年 10 月に設置され、高見三司



大司教によって祝福され

殉教者の信仰に倣い祈る

島原・天草殉教祭



10 月 13 日 (日) 13 時から、今回は北有馬町のピロティー文化センター日野江を会場に、島原教会 (山田聡主任司祭) 主催「島原・天草殉教祭」―殉教者記念ミサ―が行われた。天草の崎津・大江・本渡教会協賛。ミサには県内外各地から多くの人が集まり、島原・天草の殉教者たちの信仰の証しに感謝し、祈りをささげた。

牢屋の窄殉教祭

昨年 10 月 27 日 (日)、久賀島で牢屋の窄殉教祭が行われた。今回は例年行われていたロザリオの行列をミサの始まる 30 分前に「信仰の碑」の前で行い、13 時からミサとなった。牢屋の窄殉教記念碑の碑文朗読に始まり、中村満師 (浜脇小教区主任) 司式のもと殉教記念ミサが行われた。

碑文朗読では、迫害の痛みや苦しみがいかにも酷なものであるが語られた。狭い牢内では、身動きすることも困難で人の体にせり上げられて

た。制作は函館市の専門業者に依頼し、メインのステンドグラス 12 枚にはイエス・キリストの生涯が描かれている。野濱達也主任司祭は「朝日、夕日の時間帯は非常に美しく、夜はミサがあるときなど聖堂内の明かりに照らし出され、外から見る姿が綺麗です。いつでも気軽に見に来てください」と話している。

水ノ浦徒歩巡礼

10 月 6 日 (日)、楠原教会から楠原跡を通過して水ノ浦教会までを行く、水ノ浦教会「第 5 回徒歩巡礼」が行われた。明治の初めに先人たちが歩んだ「十字架の道 (信仰の証しの道)」を歩き、彼らの遺徳をしのび、その信仰を手本に生きること、決意しながら、参加者皆で完歩した。終了後は、女性部の用意した温かなもてなしに心満たされ、恵み多い一日となった。関係者は「皆様の参加をお待ちしています」と話している。

キシタン洞窟ミサ

10 月 27 日 (日) 11 時からキシタン洞窟ミサが行われ、各地から参加した約 100 人が先達をしのんで祈りをささげた。このミサは、「五島崩れ」による捕縛を逃れたキシタンたち三家族が洞窟に逃げ込み、発見されるまでの 2 カ月をひそかに暮らし、信仰を受け継ぐための犠牲をささげたことを記念するもの。上五島地区行事として、毎年、土井ノ浦小教区が準備しミサが行われている。

黒瀬の辻殉教祭

188 福者殉教者・ガスパル西玄可、ウルスラとい、ヨハネ又市の殉教から 410 年目にあたる 2019 年、11 月 10 日 (日) に黒瀬の辻殉教祭が黒瀬の辻公園で行われた。平戸地区長山村憲一司式のもと、地区司祭団と約 200 人の人々が共に祈った。主催した山田小教区は「生月島の殉教者の信仰を伝え続けているこの殉教祭を、もつ

お知らせ

と多くの人に体感してもらいたい」と願っている。長年にわたり黙想者のために奉仕していたイエズス会長崎黙想の家、同会日本管区によると、司祭派遣の困難さや建物改修などの理由から、昨年 12 月末をもって黙想の家としての活動を停止することになった。



カリス通信

有限会社カリスとは

No.1

有限会社カリスは 1986 年 9 月 10 日に日本カトリック司教協議会、日本カトリック管区長協議会、日本女子修道会総長管区長会の指導の下に、カトリック中央協議会の共済業務受託会社として司教団の出資により設立されました。

設立以降、カトリック中央協議会の保険部門としてカトリック共済制度を運営し、カトリック中央協議会として一括して契約することにより、スケールメリットとして保険料軽減の特典を享受しています。カリスの収益金はカトリック教会の活動に役立つよう使われております。お客様はカトリック諸機関のみとさせていただきます、カトリックの皆様に、よりよいサービスの提供に努めております。

私どもカリスは「補償は手厚く、保険料は安く」をモットーに……

- ・カトリック関連のニーズに応える商品・サービスを広く提供いたします
- ・カトリック関連の皆様へ共済制度を通じて安心と安全を提供いたします

●主なカトリック共済制度

- ①カトリック火災共済制度 (正式名称: トータルアシスト住まいの保険、企業総合保険) 教会、修道院、学校、幼稚園、病院等のカトリック関連施設に対する火災保険 (火災共済)
- ②カトリック教会学校・その他行事傷害見舞金制度 (正式名称: 行事参加者の傷害危険担保特約付帯普通傷害保険、国内旅行傷害保険) 教会学校参加中の生徒やボランティアの方が、急激かつ偶然な外来の事故によりケガをした場合に補償金をお支払いします。
- ③カトリック信徒傷害見舞金制度 (正式名称: レジャー・サービス施設費用保険) 教会施設内で入場者がケガや事故にあわれた際、見舞費用等に対して保険金を支払する制度です。 [上記引受保険会社: 東京海上日動火災保険(株)]

私たちが、お守りいたします。

服部秀昭 大水文隆 杉谷英一
神父(顧問) 三條貴英 春田照美 毛利玲子

リスク・補償に関して
何なりとお気軽
お問い合わせください
19-1C03967

カトリック共済システム 有限会社 カリス 〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館 TEL: 03-5632-4449 FAX: 03-5632-4468 連絡先 ☎ 0120-77-0033 <http://www.calis.co.jp/>

横瀬浦に御助けの聖母

陶板画建立 祝福式とミサ

昨年10月21日(月)西海市横瀬浦の巡礼地に建立された「御助けの聖母」の陶板画(※アズレージョ)の祝福式とミサが、高見三明大司教様の司式で行われた。当日は司祭団12人、信徒約100人が参加した。祝福式には見学に訪れた近所の幼稚園児40人余の姿もあった。横瀬浦は1562年に平戸を追われたポルトガル人が、日本最初のキリシタン大名・大村藩主大村純忠の招きに依って貿易港として使用したところである。当時ここには「御助けの聖母」にさげられた教会があり、ポルトガル人はこの港を「御助けの港」と呼んだと伝えられている。日本二十六聖人記念館初代館長の結城了悟神父様はこの地に記念聖堂の建立を強く希望し、ポルトガル・リスボンの「御助けの聖母教会」にある聖母像と陶板画の写真を取り寄せていたが、このたびようやく陶板画の建立が実現した。



ポルトガル・リスボンの「御助けの聖母教会」にある聖母像と陶板画の写真を取り寄せていたが、このたびようやく陶板画の建立が実現した。

※アズレージョ ポルトガル芸術を代表する装飾絵タイルのことで青色を基調としている。

鹿児島・加世田小教区 枕崎教会 長野 宏樹 (結城神父記念碑 建立実行委員会)



第2回 長崎青年の日

教皇来崎控え学び、祈り、分かち合う

11月3日(日)〜4日(月)、カトリックセンターを会場に「第2回長崎青年の日」が開催された。テーマは「いつた、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主人は。」(ルカ9・9)。日(月)、カトリックセンターを会場に「第2回長崎青年の日」が開催された。テーマは「いつた、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主人は。」(ルカ9・9)。日(月)、カトリックセンターを会場に「第2回長崎青年の日」が開催された。テーマは「いつた、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主人は。」(ルカ9・9)。



教皇フランシスコの来崎を控え、「教皇がどのような方であるかを知ること、そして訪問を受ける私たちが今後どのようなことを想っていたらいいか。」と、彼らが十字架にかかること、いつかこの日が来ることを想っていたらいいか。そう考えると、涙がこみあげてきました。教皇様を迎えた西坂は、雷と暴風雨で嵐の中にあつた。教皇様の顔が、風にあおられたケープで何度か隠れるほどでした。しかし、退場の時には雨が止み、歓喜の中でお見送りできたのです。心配された西坂から球場への移動も、路面電車が団子状態で待機して待たされ、事なきを得ました。そして、雲一つない青空のミサ。西坂から歩みを共にした司祭が「まさに殉教から栄光へ。だね」と。長崎は本場にすいところ。今ここに。翌日私は東京ドームミサでも共同司式をしました。説教の中で教皇様は、現代の日本社会を憂い、そこに暮らす人々の精神的な困窮・疲弊に思いをはせ、「教会共同体は、傷ついた人を癒や

ペトロ 吉村正寿さん

(西町教会所属)



昨年9月26日逝去。57歳。2007年5月から長崎市長を8年、15年4月から長崎県議を4年務めた。10年5月、核拡散防止条約(NPT)再検討会議に参加するため訪米した際は、被爆マリア像と共に訪問先の施設などで核廃絶を訴え、被爆2世としての経験を公の場で初めて語った。長崎教区においては平和推進委員、会創設当初から事務局長の役を担い、教会の青少年が平和の担い手となるよう、特に広島・沖縄平和学習などに献身的に取り組んだ。明るく気さくに人と交わり、温かみのある人柄だった。葬儀ミサ・告別式は9月29日、西町教会で行われた。

アントニオ 中島秀幸さん

(大浦教会所属)



10月3日逝去。63歳。DEITZ(ナガサキフォトサービス)に勤務し、ヨハネ・パウロ2世、マザー・テレサ来崎時は取材班として撮影にあたった。188殉教者列福式や信徒発見150周年記念行事の公式カメラマン、叙階式や二十六聖人殉教祭、平和祈願祭の撮影など、奉仕活動でも陰で教区を支えた。所属教会では長年広報委員長を務め、教会の人々が集い、交わり、祈る姿を写真におさめた。教会の友人は、「上手というだけでなく、写真の中に『信仰』が入っていた。(11月の)教皇ミサもきくと撮りたかったらう」と故人をしのんだ。葬儀ミサ・告別式は10月5日、大浦教会で行われた。

エネミア 水野玲子修道士

(純心聖母会)



10月4日逝去。82歳。1937年神奈川県生まれ。58年入会。60年初

テレジア 梅木公子修道士

(お告げのマリア修道会)



10月25日逝去。79歳。1940年神戸市生まれ。57年奥浦修道院入会。

マリア 藤澤ハルエ修道士

(お告げのマリア修道会)



11月10日逝去。88歳。1930年平戸市生まれ。57年太田尾修道院に入会。

短信

〈下五島地区女性部ミニバレーボール大会〉
昨年10月14日(月)福江小学校体育館で開催され、大いに盛り上がった。大会は他の地区に倣って始めたもので今回が第1回。結果は1位三井楽、2位浦頭、3位水ノ浦。

〈堅信式〉
昨年10月27日(日)東長崎教会で中学生19人が受堅した。また11月10日(日)上五島地区合同堅信式が青年教会で行われ、中学生25、大人4の計29人が秘跡にあずかった。

〈神学院主催の行事〉
11月2日(土)〜3日(日)長崎カトリック神学院で一泊体験入学があり、小学生10人と中学生3人が参加。また、11月4日(月)は福岡カトリック神学院(福岡市城南区)で神学院祭があり、長崎からも多くの大人・子どもが参加し、にぎわった。

〈司教座聖堂献堂記念〉
浦上司教座聖堂献堂記念日の11月1日、18時半からミサが行われた。2019年は献堂60周年だった。

〈感謝〉
長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

誓願。69年終生誓願。初め手術を受け療養。その後再発し手術したが、後遺症のためベッドに横たわったままの状態を余儀なくされた。最後まで十字架のキリストの苦しみに合わせて、捧げ尽くした闘病生活だった。葬儀ミサ・告別式は10月6日、本部聖堂で行われた。深く、聖マリア病院などの建築時にその才能を発揮。また料理や切り絵などで多くの人の喜びとなった。病院長退任の直後、くも膜下出血のために左半身不随となり、リハビリに励んだが再発し、意識が回復しないまま帰天した。葬儀ミサ・告別式は10月27日、福江教会で行われた。

入会。67年初誓願、74年終生誓願宣立。26歳の時、太田尾修道院創立の最初のメンバーとして入会。太田尾保育園で調理を担当。寛容で静かな人柄だったが、心が強く物事に対する観察力も鋭かった。姉妹や信徒、司祭に対して温かく接し、さりげない心遣いの人だった。57年太田尾修道院に入会。

た。太田尾を離れた後は神学院、カトリックセンター、田平などで司祭に仕え神学生養成に協力した。太田尾に戻ってから司祭館や修道院で奉仕したが、夏に肺炎で入院。最期まで忍耐強く、静かに苦しみ耐えた。葬儀ミサ・告別式は11月12日、太田尾教会で行われた。

長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

長崎カトリック神学院 女性部代表者らは大司教館を訪れ、神学生養成援助のための献金75万8千4210円の小切手を高見三司教に贈った。

殉教から栄光へ
私はいつもあなた方と共にいる
ピカッ！ゴロッ！車のフロントガラス越しに目に入った縦に落ちる稲妻の閃光。西坂の集いに向かう車中で、運転手さんが「今日はローマ法王が来るけん、すごかしのあるとたいね」と話しかけてくれました。確かに朝からただならぬ気配が。駅前のバスセンターの隅で修道服に着替えた私たち6人のフランシスカーン。西坂のセキユリテールを通った時には、雨が降り始めていました。傘もささずに待つこと2時間半。私は、ブロンズの26聖人像の中のペトロ・パプチスタ神父を探しました。今から、およそ530年前禁教令が出ている日本に外交使節として入り、豊臣秀吉から居住地として与えられた京都四條堀川に生きたフランシスコ会宣教師です。貴あれば賤あり」という京の都で、鴨川べりに暮らす病人や差別を受けていた人々たちを

みことばにふれて 165

ペトロ 松本 (フランシスコ会 長崎修道院)



チャペルを秀吉の命を受けた石田三成が急襲し、宣教師や信徒たちを捕らえて耳を削り、見せしめのために長崎に連行しました。長崎への道の始まりです。この一行に、途中で信徒が加わり、西坂では26人の殉教者となったのです。「みんな、よく頑張ったね。もうすぐ